

~~~~~  
書 評  
~~~~~

Edith Kuiper, *A Herstory of Economics*, Cambridge, UK: Polity Press, 2022, 256pages.

生 垣 琴 絵

本書は、経済思想史において「女性」の存在が無視されたり、軽視されたりしていることに対する問題意識から発せられたものである。筆者であるエディス・カイパー (Edith Kuiper 1960-) は、*Toward a feminist philosophy of economics* (London New York: Routledge, 2003. Drucilla K. Barker との共著) や、*Women's economic thought in the eighteenth century* (New York: Routledge, 2014) など、女性による経済思想やフェミニスト経済学に関わる業績をもつ人物である。また、彼女は、2006年から2007年国際フェミニスト経済学会の会長を務めた経験がある。

本書の冒頭でカイパーは、「経済思想史の研究者たちは、近年、経済学の概念やモデル、理論の発展をより理解するために、政治経済とは直接関係のない事柄（戦争や革命、政治的反動、経済危機、個人的な交友関係、精神衛生上の問題、階級、個人的な悩みなど）に注目し、外在主義的アプローチを適用することに関心を持つようになっていく」と述べている (Kuiper 2022, 11)。本書の視点、すなわち、女性の役割や経済学におけるジェンダーをめぐる規範、価値観、制度的慣行への関心もそのようなアプローチの一つとして提示されているのである。

タイトルにある「herstory」という語は、1970年代ごろから女性（もしくはフェミニスト）の観点から見た歴史という意味で用いられ始めた

という。序文において、著者は、「本書は、経済思想のより拡大した歴史、女性の歴史 (herstory) について語っている」と述べることで、この語を印象付けている (Kuiper 2022, ix)。

本書が扱っているのは、18世紀と19世紀のイギリスとフランス、そして19世紀と20世紀のアメリカで、女性たちがどのように生きてきたか、彼女たちが遭遇した経済問題、それに対して彼女たちが提案した解決策などである。そこから、彼女たちの経済観を伺い知ることができる。

本書の主な目的は、ジェンダーを理由に歴史の隙間からこぼれ落ちてしまった女性たちの経済に関する豊富な著作を読者に紹介することにある。経済的なテーマや理論を扱ういわゆる「女性経済学者」だけでなく、自分自身の経験に照らして経済に関して著述した女性たち (女性経済作家) と彼女たちの業績について紹介している点が特徴である。ここでいう女性経済作家とは、経済に関するテーマについて述べていたが、学問的地位を持っていなかった女性たちを指す (Kuiper 2022, 3)。彼女たちに学問的地位が欠如していたのは、大学が女性たちに対して閉鎖的であったことが大きな要因である。つまり、本書は、女性であるがゆえに、男性が持っていた資源 (教育を受ける機会を含む) をほとんど利用できず、排除され、沈黙させられた状況において、それでもなお発せられた女性たちによるさまざまな隠れた声を集めたものともいえる。確かに、本書に登場する女性たちの多くが、経済思想史の研究者にさえあまり知られていないように思われる。

経済思想史という分野は、主に西洋の「男性」経済学者たちの生み出してきた成果で構成されている。本書において、著者は、これまで経済思想史に登場する女性経済学者といえば、ジョーン・ロビンソン 1名のみか、ジョーン・ロビンソンとローザ・ルクセンブルクの2名かだろうと指摘する。しかし、この偉大な二人の女性経済学者は、本書に登場する女性たちとは異なり、男性が作り上げてきた伝統的な経済学の枠組みのなかで活躍したに過ぎず、二人のなかには女性として

の（ジェンダー的な）問題意識や関心は存在しなかったと著者は捉えている。

本書は、「政治経済学の誕生」という第1章から始まり、教育、生産、分配などのテーマごとに9章で構成されている。評者の関心から注目したいのは、「消費」と題する第7章である。著者は、消費を「女性が日常的に多くの経験をしてきた分野」と捉えた上で、まず、シカゴ大学の家政学部の創設に関わったマリオン・タルボットとソフォニスバ・P・ブレキンリッジを紹介している。タルボットとブレキンリッジは、「消費と家事労働を直接結びつけ、何を購入し、何を自分で作るかという問題を詳細に論じた」学者として位置付けられている（Kuiper 2022, 134）。続いて、20世紀に入り、シカゴ大学でタルボットたちの後継として消費に関する画期的な理論的・実証的研究を行なったヘーゼル・カークが登場する。カークは、彼女の主著 *A Theory of Consumption* (1923) において、従来の経済学が消費や消費者を軽視していたことを指摘し、「限界効用論者は、価格法則を定式化するために必要と考える以上に、消費の研究を追求することはない」として批判した。著者のカイパーは、カークが、「消費者の役割を、単に好みの順位をつけたり、価格を考慮して提供される商品やサービスの選択をしたりする以上のものであると捉えていた」こと、さらに、「消費は能動的なプロセスであり、消費者は生産に携わる人々と同様に経済の方向性を決定する重要な役割を担っている」存在として捉えていたことを強調し、その意義を示している（Kuiper 2022, 136）。そのほか、カークの教え子であるマーガレット・G・リードの家計生産の理論や、エリザベス・エリス・ホイットの人類的なアプローチによる消費研究、さらに、最初のコピーライターとされる人物の一人であり、消費者の視点に立った実践的なマーケティング研究の創始者の一人でもあるヘレン・ウッドワードがこの章に登場する。このような女性経済学者たちを「消費論」の担い手として位置付け紹介している点は、女性経済学者たちの研究成果を掘り起こすという本書の目的にかなうだけでなく、20世紀初頭か

ら戦間期に主流派の経済学とは異なる視点と方法をもつ多様な消費論が展開していたことを理解するためにも、有効な内容となっている点を指摘しておきたい。

最後に、本書の限界と意義を述べておこう。カイパーは、本書に総勢98名にのぼる女性たちを登場させている。その目的は、知られざる女性経済作家や女性経済学者を「リストに挙げる」ことであり、それは、まさに日陰に隠れた存在であった女性たちを「陽の当たる場所」に連れ出したと言えるだろう。確かに、本書により経済思想史のリストに彼女たちの名前が挙げられたことは間違いないだろう。他方、それぞれの人物、思想、歴史を深く掘り下げるには至っていない部分もあり、広く浅くという印象は否めない。しかし、これまで触れることのなかった女性たちの経済・経済学に関わる主張を目にした私たちは、これから先、彼女たちを無視することはできないはずである。今後、本書によって光が当てられた女性たちが、経済思想史に位置付けられていくことにより、「男性が何世紀にもわたって発展させてきた経済学」が捉え直されたり、新たな展開が生まれたりする可能性は大いにあるだろう。